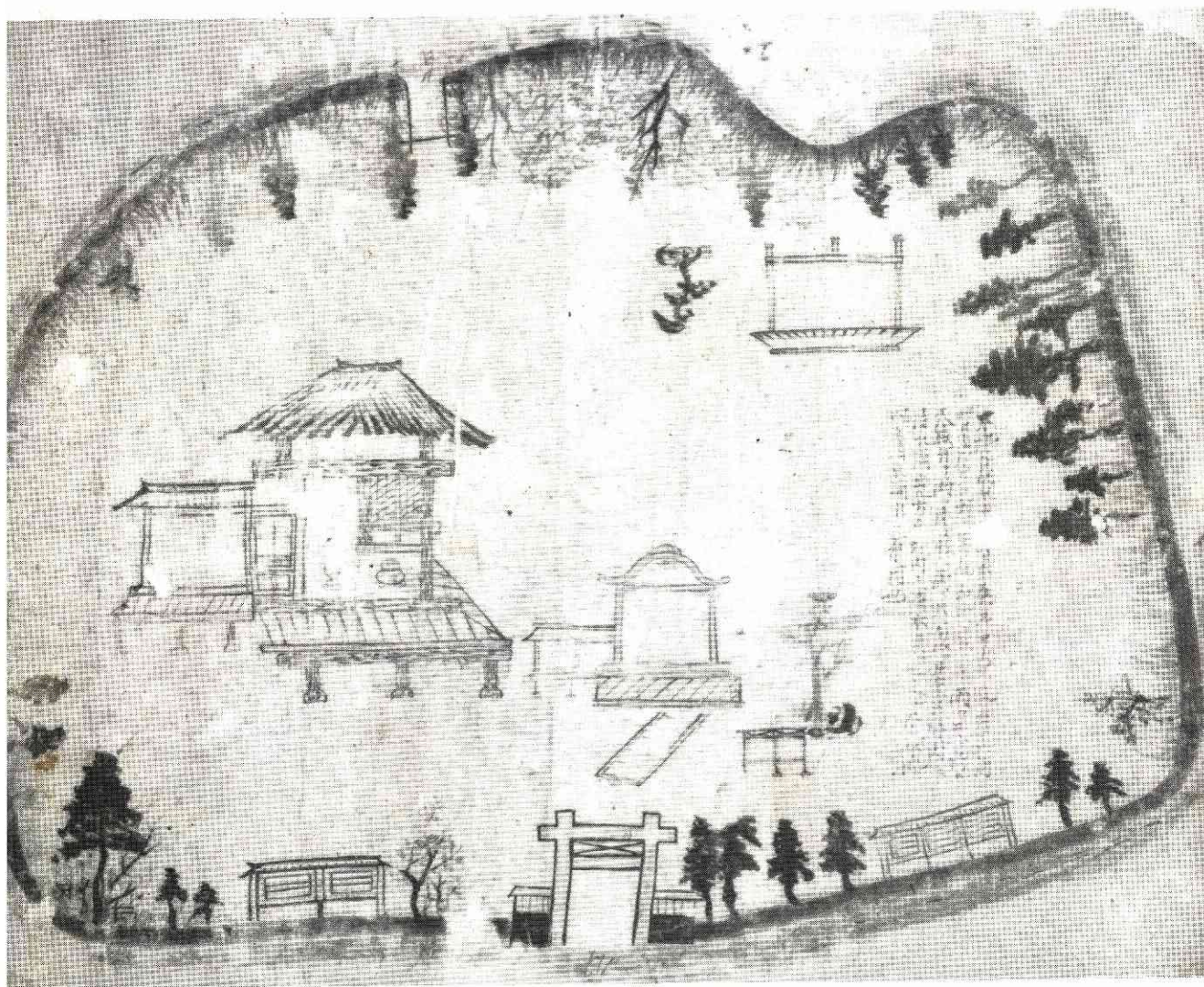


# 金井の文化財

## 第 二 集



1 9 7 7

金 井 町 教 育 委 員 会  
金 井 町 文 化 財 調 査 審 議 委 員 会

## 第 1 次指定文化財所在地

### ◎ 聖観音立像

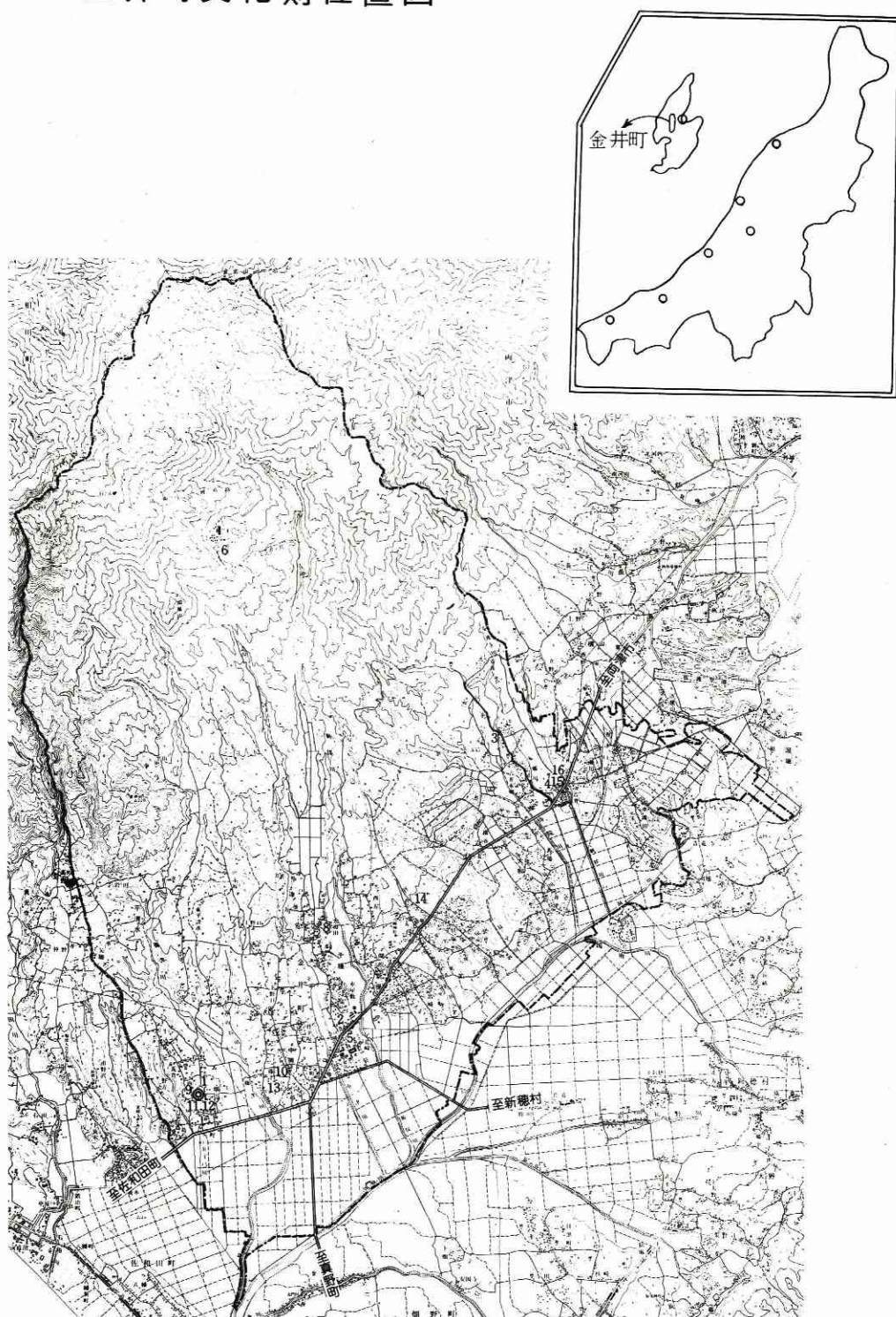
- 1 黒木御所（史跡）
- 2 明治記念堂（史跡、建造物）
- 3 方便法身像（絵画、書跡）
- 4 佐渡国絵図（書跡）
- 5 藍原白鷗寄進状（古文書）  
天正検知帳（古文書）
- 6 三本こぶし（天然記念物）
- 7 ブナ純林 （     //     ）
- 8 大般若波羅密多經（典籍）
- 9 日興上人自筆         （書籍）

## 第 2 次指定文化財所在地

- 10 聖徳太子、来迎阿弥陀、来迎阿弥陀三尊（絵画）
- 11 郷倉（建造物）
- 12 考古資料（埋蔵文化財）
- 13 屋敷絵図（絵画）
- 14 新田開発資料（古文書）
- 15 印信（古文書）
- 16 不動明王光背（彫刻）



# 金井町文化財位置図



## 目 次

### ・第二集刊行にあたって

教育長 山西 貞 夫 …… 3

### ・国指定家屋（建造物） …… 4

### ・町指定文化財

聖徳太子、来迎阿弥陀 …… 5

来迎阿弥陀三尊（絵画） …… 6

郷倉（建造物） …… 8

考古資料（埋蔵遺物） …… 10

屋敷絵図（絵画） …… 12

新田開発資料（古文書） …… 14

印信（古文書）、不動明王光背

…… 16

### ・あとがき …… 18

（表紙は屋敷絵図）

## 第 二 集 刊 行 に あ た つ て

金井町教育委員会は文化財調査審議委員会の答申を得て昭和45年4月1日付で7件、次いで昭和47年2月1日付で2件を町の文化財として指定した。これらの文化財の調査報告書は、「金井の文化財」第一集として昭和48年2月に刊行し、町民各位並びに関係方面に配布し報告した。

その後5年、町文化財調査審議委員各位はこの間においても絶えず調査研究活動が続けられ10件の文化財を町指定とするよう答申されたので、教育委員会は更にこれに検討を加え、昭和51年2月10日10件のうち7件を新たに町文化財として指定し、これを公示した。今回「金井の文化財」第二集としてこれを印刷に付し広く町民各位に新指定文化財の内容と、これが文化的・学術的価値の概要をご理解願うため頒布することにした。

この報告書を通じて、町民各位が文化財に対する理解と認識を深められるよう希望すると共に、町民の精神的財産である文化財を愛護・保存しようという意識が高まるならば幸甚の至りである。

なお、これまで色々の困難な条件を克服され、文化財の調査と研究に努力された調査審議委員及び事務局員のご苦勞に対し厚くお礼申しあげ、発刊のことばとする。

昭和52年1月

金井町教育委員会

教 育 長      山      西      貞      夫



国指定 重要文化財

## 北条家住宅 杢棟

所在地 金井町大字泉乙33番地  
所有者 北条 フジ  
管理者 同上  
昭和51年国指定 建造物



北条家の祖先は丹波国の出身で、寛文3年(1663)直訴の罪により佐渡へ流され、元禄8年(1695)赦免後当地に住み付いたと伝えている。以来、代々道益を名乗り、医を業としてきた。住宅の建築年代については、資料がなく明らかでないが、手法からみると18世紀後半と考えられる。

桁行16.6m、梁間10.1m、寄棟造、茅葺で、南正面と西側面に棧瓦葺の庇を設ける。現在の庇は後設されたものであるが、正面の庇はもともとあったと思われる。

構造は梁間4間に、牛梁を挟んで二重梁を架け、梁上には真束と小屋束を立てて貫で固め、叉首を組む。柱は総体に細く、側柱と内部柱の差が少ない。柱間寸法は畳長さ5.85尺を基準として決めているようである。

平面は桁行9間のうち、西寄り2間半を土間とし、後方には床板を張る。床上部は喰違い4間取りの上手に2室を加えた形式で、桁行6間半のうち土間寄り3間が「おいえ」と「なんど」、つぎ2間が「なかのま」「ぎしき」、一番上手が6畳室と縁付の4畳室となる。座敷には床、仏壇を設け、天井は「なんど」を根太天井とするほかは、各室とも竿縁天井を張る。

この住宅は新潟県下でも越後の民家に比べて木柄が細く、座敷回りには洗練された感がある。佐渡地方を代表する遺例であり、保存はきわめてよい。



画 61.5cm×28.2cm 像高 38cm



来迎阿弥陀絵像



画 89.9cm × 39cm 像高 43.8cm

来迎阿弥陀三尊絵図



画 91.8cm × 34.4cm 像高 14.5cm  
左右 14.5cm



( 町 指 定 文 化 財 )

## 聖 徳 太 子 絵 像 来 迎 阿 弥 陀 絵 像 来迎阿弥陀三尊絵像

所在地 金井町大字中興乙 1 3 7 1 番地  
所有者 宗教法人浄土真宗本間山西蓮寺  
代表者 本 間 チ エ ノ  
管理者 同 上  
指 定 昭 和 5 1 年 2 月 絵 画

### 聖 徳 太 子 絵 像

孝養太子像という形式の絵像である。

この絵像は、上部にすだれ幕があり、衣や紐類にはあざやかな朱色が多量に使われている。これは、古い時代の太子絵像の特色である。本願寺 8 世蓮如以降に本願寺が下付する太子絵像と、はっきり区別できる。

古い時代のものでありながら、画材は絹でなく紙に描いてあることもめずらしい。

### 来 迎 阿 弥 陀 絵 像

阿弥陀来迎図は、平安時代中期以降の浄土教の発展にともなって、数多く作製されるようになった。

蓮如以降の本願寺系の阿弥陀絵像（方便法身像）が、蓮の花の蓮台の上に立ち 4 8 本の後光に統一されるのに対して、この画像は、後光が 1 5 本で雲に乗っている点に大きな特徴がある。

### 来迎阿弥陀三尊絵像

中央が本尊阿弥陀如来、向って左は観世音菩薩、右は勢至菩薩で 3 尊形式であり、雲に乗った来迎図である。

この画像の十三光仏とか前述の十五光仏とかの形式は、本願寺 5 世緯如の頃の北陸教団の本尊に多い。しかしこの画像は、もともとは古い天台時宗系の浄土信仰の本尊と思われる。

ここにあげた三絵像は、ともに西蓮寺に現存する古本尊のうちでも、最も古い時期のもので、南北朝期（1 4 世紀中頃）のものである。





( 町 指 定 文 化 財 )

郷 倉

所在地	金井町大字泉 3 7 5 番地 金井町立歴史民俗資料館敷地内
所有者	金井町
管理者	金井町教育委員会
指 定	昭和 5 1 年 2 月 建造物

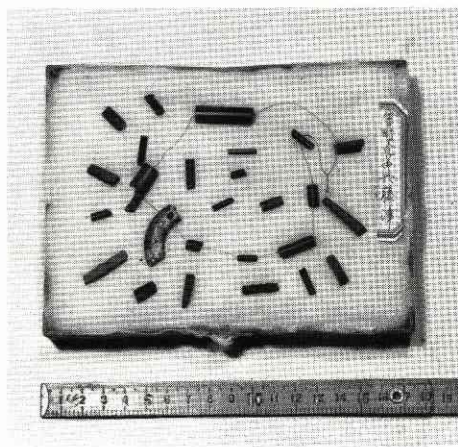
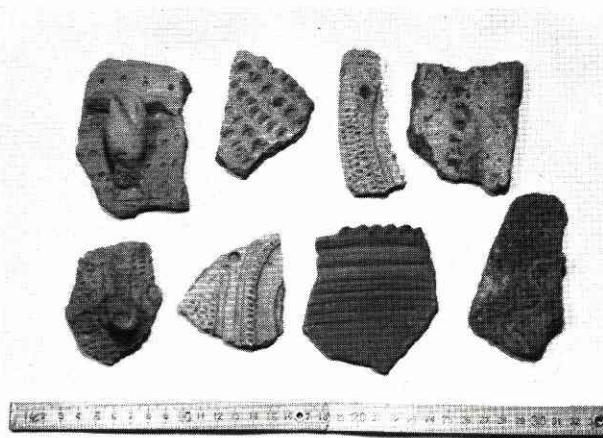
郷倉は、江戸時代に年貢を入れた蔵をいう。

いつ成立したかは明らかではないが、元禄 4 年の記録に見え、元禄 7 年(1694)には、島内に 9 6 ケ所の郷倉があった。佐渡全体の村数は、約 2 4 0 ケ村であるから、かならずしも一つの村に一つ置かれていたわけではない。

百姓は定められた日に、郷倉へ年貢米を納める。郷倉の庭では、目付・地方役人が相川からきて役人の見守るなかで名主、米見、斗捧立合で米をはかり、中札をつけて納めさせる。更に必要に応じて相川・夷・大石・河原田の蔵に納めさせた。

町内の郷倉は、天保年間( 1 8 3 0 ～ 1 8 4 4 )に、吉井本郷・水渡田・船津・貝塚・新保・本屋敷・上中興・下中興・和泉の 9 ケ所に置かれていた。

指定の郷倉は、もと上横山村(村高 6 8 0 石)の郷倉であったが、明治年間に個人の所有に帰し、納屋として利用されていた。この度不要となったため、当町へ寄付されたものである。移転の際、補修を加えたが柱など多くは以前からのものが使われている。現存する郷倉は稀であり、貴重な存在である。



寄贈者 金井町大字中興 8 3 0 番地

鈴木 三 次 明治 3 5 年 8 月 2 8 日 生



( 町 指 定 文 化 財 )

## 考 古 資 料

所 在 地	金 井 町 大 字 泉 3 7 5 番 地 金 井 町 立 歴 史 民 俗 資 料 館 内
所 有 者	金 井 町
管 理 者	金 井 町 教 育 委 員 会
指 定	昭 和 5 1 年 2 月      埋 蔵 遺 物

鈴木三次氏からこの度寄贈された考古遺物は、金井町を始めとし、島内各地から収集された埋蔵遺物の全部である。信仰の対象である縄文時代の石棒、弥生時代の勾玉、生活用具としての石斧、石鏃・漁撈用の錘などの石器類、弥生時代の農耕用木器類、各時代の各種土器類（墨書を含む）などである。

これらの遺物は、単に金井町ばかりでなく、佐渡島民にとって、原始・古代史の解明になくてはならない貴重な遺物ばかりである。

鈴木三次氏が探訪し、遺物を収集された遺跡は41ヶ所、寄贈された遺物は、

### 土 器 類

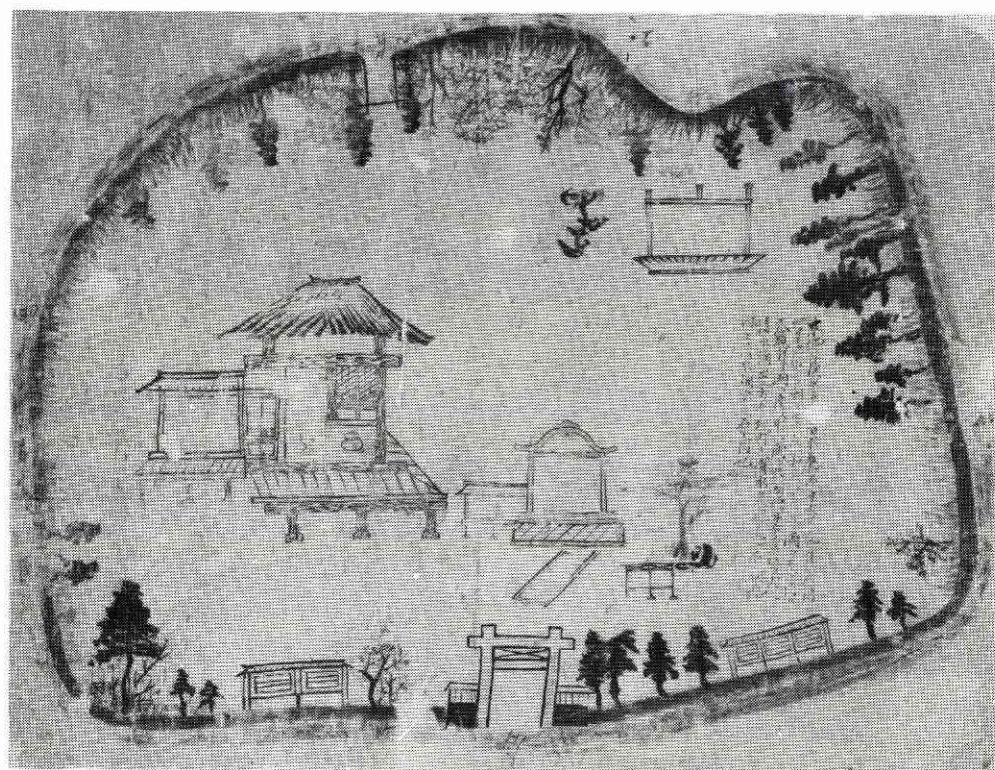
縄文式土器片692点、弥生式土器片620点、土師器及び片115点、須恵器及び片131点、その他に陶馬（馬の首形）に焼いたもの・土錘などの完形品を含む遺物30点、合せて1,588点。

### 石 器 類

石棒・石剣・石皿・敲石・石斧・石錘など74点、石鏃488点、石錐37点、玉作関係では石鋸・管玉などの完成品及未製品など333点、有孔円板6点、合せて938点、剝片は実に3,864点に達する。

### そ の 他

獣骨製装飾品・鉄製品・貝類・木器類・植物遺物など合せて57点。  
総計6,447点となっている。



画 縦30cm 横 48cm



( 町 指 定 文 化 財 )

## 屋 敷 絵 図

所在地	金井町大字中興乙799の1番地
所有者	木村九右エ門
管理者	同 上
指 定	昭和51年2月 絵 画

この屋敷（館）絵図を見ると、太い黒線で土塁を描き、30本ほどの樹木があしらわれ、外側の堀は薄墨で描いてある。いわゆる環濠屋敷の姿である。

とくに注目すべきは土塁及び堀の東北隅が内側に凹んでいることである。鬼門除けの観念から意識的に欠かしたのであろう。

南側の土塁の中央部に正門が、北側には裏門がある。内部には、向唐破風の中門があり、その西隣りには、草ぶき寄棟の母屋と板ぶきの中門がみられる。向唐破風中門造の建築物を描き得ず、2棟に描いたものであろう。こうした中門造の住居は、鎌倉時代からの武家住宅の形態であり、この絵図の建物を戦国時代のもものとみて、武家造の形態が引きつがれてきたものとする。村殿が百姓出身者でありながら、地頭の代官として武家待遇を受けていたことがわかる。

木村氏宅地は「城の内」という地名をもち、現在もわずかに堀跡などを残していることからみて、戦国時代の名主の屋敷跡、すなわち藤津村の館跡とみられるわけである。

現在、佐渡の民家の中には中門造がみられないが、中世末の佐渡の土豪層の屋敷にこのような中門造が存在したことが、この絵図によって確認されるわけで貴重な資料である。

絵図の中に「本地、清水者、口昔明応年中大旱魃の時・・・・・・」と書きこまれた文面からみて、明応年間（1492～1501）を大部下る時期の屋敷のようすと考えられる。



( 町 指 定 文 化 財 )

## 新 田 開 発 資 料 ( 絵 画 を 含 む 3 2 点 )

所在地 金井町大字貝塚 8 4 5 番地  
所有者 石 井 治 作  
管理者 同 上  
指 定 昭和 5 1 年 2 月 古文書 ( 絵 図 を 含 む )

貝塚石井家には、江戸前期から後期にいたる一連の用水史料が保存されている。

寛文元年 ( 1 6 6 1 ) 佐渡奉行御手洗四郎兵衛は、佐渡地役人が小禄で生計困難なことを理由に、幕府へ願い出て、地役人が空閑荒地を新開して田地を持つことを許した。地役人、内藤兵右衛門・萩野平太夫の兩人は、相川役所に勤務しながら、貝塚には田屋とよばれる広壮な下屋敷を持ち、手代を置いて空閑蕪地を新開し、経営管理をした。実際に耕作に従事したのは、貝塚百姓の二・三男であった。

貝塚村のこの一帯がこのころまで開かれなかったのは、水利の関係からであった。内藤・萩野兩人は、貝塚の原野に、新保川夏渡り堰を開いた。一般には、殿江という。

こうして開かれた貝塚新田は、一般の新田とは非常に性格を異にしている。旧来の用水堰より上手に堰を設け、堰落しにのぼらなくても引き水が認められた。そこには役人の権威が感じられる。けれども、たとえ原野であっても貝塚の村人の用水権を犯したし、渇水期ともなれば、他の新保川水系の諸堰からも迷惑がられた。境界論争や水論は絶えなかった。

「新田大絵図」は貝塚村と、内藤・萩野兩人との境界論争を決定したものである。また、他の水利関係史料は殿江と他の江筋とのかかわりあいを示している。いずれにしても、石井家文書は、武士が農村に新田を開き、経営したことを示す一つの貴重な史料である。



( 町 指 定 文 化 財 )

印 信  
不動明王光背

3 3 通

所在地 金井町大字吉井本郷485番地  
所有者 宗教法人真言宗功德山大聖院  
代表者 白 杵 快 隆  
管理者 同 上  
指 定 昭和51年2月 古文書、彫刻



傳灯位權少僧都空日示

永正拾二年上拾月四日 幸性

後醍醐

不可餘念耳

書興也是則酬佛恩答師德吾願祝

印可仍不能故障早速相養印願所

血脉相養明鏡也幸性付小僧邊懇乞

七代大悲台藏三十六葉傳授汝歸寶

弘法大師既八葉今至愚身金剛密三

如是金砂密之道延吾祖師根本阿闍梨

會授金剛薩埵教百歲之後教龍猛菩薩

昔大日如來開大悲台藏金剛密教南都

傳法灌頂阿闍梨住事

## 印 信

印信とは、お寺の法脈を示す資料で宗教資料として重視される。

大聖院は、かつては下野国小股の鶏足寺末であった。当寺には、古い時代からの印信がある。

嘉吉 2年(1442)俊海→俊慶	天文11年(1542)賢定→賢良
年 不 詳 俊慶→澄恵	〃 16年(1547)増弁→宥鏡
明応 3年(1494)澄恵→俊尊	〃 20年(1551)慶雄→宥鏡
文亀 2年(1502)澄恵→俊聴	〃 23年(1554)頂俊→快英
永正12年(1515)空日→幸性	弘治 2年(1556)俊聴→尊陽
〃 15年(1518)憲勝→幸性	〃 4年(1558)賢円→良尊
〃 18年(1521)堯栄→耀慶	永禄 5年(1562)宥真→宥翁
大永 5年(1525)長快→賢高	〃 8年(1565)宥順→
〃 6年(1526)円禅→禅翁	慶長 7年(1602)慶弁→宥尊
享禄 2年(1529)聖順→聖慶	〃 ( 〃 ) 慶弁→宥円
天文 9年(1540)賢高→	以下略

これらの印信によって、従来明らかでなかった醍醐三宝院流の教線が、永正期に当地にのびていることがわかる。なお、写しではあるが、14世紀はじめの松橋流の印信がある。古くなった印信を写し直したものであろうが、こうしたものが存在することによって、松橋流の教線が佐渡に入っていることもわかる。さらに明徳5年(1394)の神事次第(天文の写し)も重要である。

## 不 動 明 王 光 背

大聖院は、永禄6年(1563)に焼失した。

その後、宥順の代に再興されたがその時、一透斎というものが不動明王を刻んだ。光背には、

宥順大聖院代再興一透斎為寄進作之

永禄六年癸亥三月廿八日成就畢

とある。一透斎は、室町時代後期の佐渡にあって、能面づくりの師匠であったとの伝承が各地に残されている。その一透斎が、この銘文の一透斎を示すと考えてよい。

## あ と が き

昭和 48 年 2 月、第 1 集刊行以後も私共金井町文化財調査審議委員一同は、調査研究活動を続け、第三次答申として 10 件を教育委員会に提出した。

今回、教育委員会において検討の結果、そのうち 7 件を町指定として公示し、これを「金井の文化財」第 2 集として刊行し、町民各位のお手元に届けることになった。

本書を通じて何卒金井町の精神的財産である文化財についてご理解を深められると共に、今後の調査・研究活動に更にご協力を賜りますようお願い申しあげ、後記とする。

昭和 52 年 1 月

金井町文化財調査審議委員会

委員長 小 林 貞 治



#### 第四次調査審議委員

委員長	小林 貞 治	副委員長	児 玉 卯一郎
〃	計 良 春 野	〃	中 川 喜代治
〃	中 村 諦	〃	本 間 建一郎
〃	小林 治右門	〃	児 玉 信 雄
〃	田 中 圭 一	〃	三 川 義 則

#### 第五次調査審議委員

委員長	小林 貞 治	副委員長	児 玉 卯一郎
〃	計 良 春 野	〃	中 川 喜代治
〃	田 中 圭 一	〃	本 間 建一郎
〃	中 村 諦	〃	児 玉 信 雄
〃	小 菅 徹 也	〃	三 川 義 則

説明担当	田 中 圭 一	児 玉 信 雄	小 菅 徹 也
	山 本 仁	中 川 喜代治	

編集担当	渡 辺 正 治	関 根 宣 昭
------	---------	---------

写真担当	北 見 勇 雄	高 橋 元 輔
------	---------	---------

監 修	田 中 圭 一	中 川 喜代治
-----	---------	---------



金 井 の 文 化 財

第 二 集

---

編 集	新潟県金井町教育委員会
発 行	同 上
印 刷	佐和田町東大通り 佐 渡 中 央 印 刷 所





